

社に再編成されて今日に到つてい
る。

通信の場合、国家機密保持の觀
点と全国や全世界との連係無しに
はその機能を果せない所から仕方
が無かつたと推察されるが、自由
化が開始されたのはつい16年前か
らである。

その所為か当面の利益重視、お
客様不在での熾烈な事業展開が散
見されるのはいかがなものであら
うか。いづれ電力で経験した自然
淘汰、数社への大同団結への道を
歩むのではないかと危惧される。

一方電力の方は明治16年(1883)

東京電灯が開業し、当初か
ら自由化のスタートを切つてい
る。当時の官庁は通信と同じ工部
省であった。その後各地域に事業
者が急増し、明治40年には116社と
なる。大正10年(1921)大同
電力が設立され、昭和5年には735
社も群雄割拠していた事業者も順
次5大電力会社(東京、東邦、大
同、宇治川、日本)へと大同団結
してゆくこととなる。その後戦時
体制の日本発送電株が昭和14年
(1939)に設立されて、通信
省のもとで国家統制が始まり17年
の9配電会社設立へとつながつて
ゆく、戦後電力不足で混乱の最中
の昭和26年(1951)に現在の
9電力が誕生する。

そして平成12年(2000)に
部分自由化がなされたが、いわば
62年後に第二の自由化がスタート

したと言えるのであらう。

最近の米国西海岸の電力自由化

による停電や料金値上げなどの大
混乱に見られるように、経済学者
や行政が主導する経済原則のみに
見られるのはいががなものであら
うか。いづれ社会のライフラインの根幹をな
き社会のライフラインの根幹をな
どが疎かになる

や行政が内在している。恐れが内在して
いづれにしても情報や電力の如
き社会のライフラインの根幹をな
どをよく踏まえた上で熟慮
されたゆるやかな制約付自由化が
望まれる所である。

5 通信と電力の比較

通信と電力システムの概要を第
一図に示す。この図を参照しながら
両者の比較を試みることにする。

まず「入出力」について言うと
通信が情報と言う個別製品を双方
に向(N:N)に伝送しているのに
対して、電力はエネルギーと言
うN:Mに送電している。

「変換」については全く類似し
ているが、使用周波数が異なると
変換装置が、電子機器と発電機、
電動機等であるのが違つてゐる。

「伝送」については、通信はま
ず交換機能が必要なのに、電力に
は全く存在しない。

伝送の大容量化については通信
は多重化、電力は高电压化とかな
り類似しているが、大容量化率は
通信の方が格段に高い。

「伝送効率」について考察して
みると通信では符号誤り率(%Es)
がその代表であらうか、数%以下
と言ふ好効率であるのに対し、
電力エネルギー効率は数十%程度
の低い効率となつてゐる。この辺
が情報網と電力網との基本的特性
差であつて、情報は全世界を視野
に入れ得るが、電力は距離的制約
からも地域や国毎に独立システム
となり易い。

懇話会のご案内

恒例の電気系教室懇話会を左記のとおり開催します。万障お繋り合
せの上、ご出席を賜りますようお願い致します。

記

日 時 平成13年10月26日(金) 15時~

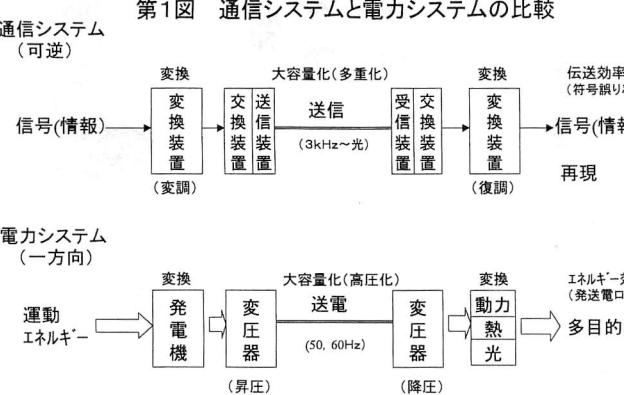
一、講演会

講演者 西川 祐一 大阪工業大学学長

森田 憲一 (株)日立製作所大みか事業所長

「高度道路交通システム
(Intelligent Transport Systems)」

荒井 春市 (株)村田製作所 野洲事業所長
「モノづくり社会に求められること
(部品メーカーの立場で)」



画像、データ)毎に様々な指標は
存在しても総合指標はや、不明確
である。これからIPが進展して
ゆくにつれて伝送遅延時間なども
指標化する必要が出て来よう。

以上は平均値の話だが、稀頻度
事故を考えてみると、通信の場合
は自然現象や設備事故以外にある
社会現象を契機として情報量が急
増し、輻輳状態になつて全体シス
テムがダウンする事が時々発生す
るが、電力系では原理的に不安定
現象はあるものの、予測又は外科
的高速制御でシステムの安定性を
保つようにしてゐるので、全体シ
ステムがダウンする事は少い。

さて色々な面から両者の比較を
試みて来たが、どちらも基本的に
役を荷つてゐると見えよう。
両システム共、どれだけ人間シ
ステムに近付いてゆけるかが、今
後の重要な課題であると筆者は思
てゐる。

洛友会員諸兄の今後の益々の御
发展と御研鑽を祈念してこの駄文
を終らせるとしてする。

後の重要な課題であると筆者は思
てゐる。

洛友会員諸兄の今後の益々の御
发展と御研鑽を祈念してこの駄文
を終らせるとしてする。

は運輸業であつて、他の現存シス
テムに無理やり例えるなら、通信
は「宅配便」、電力は「水道」で
あらうか。

私がいつも最も素晴らしいシス
テムと思つてゐる人間の器官に例
えると通信は勿論神経系統であ
り、人間の智能や生活、文化に関
する所、電力は血管系統であつて、
生命の維持や活動の基盤を支える

テムと思つてゐる人間の器官に例
えると通信は勿論神経系統であ
り、人間の智能や生活、文化に關
する所、電力は血管系統であつて、
生命の維持や活動の基盤を支える



故 桑原 道義 名譽教授

桑原道義先生を偲ぶ
英保 茂（昭39年卒）
本学名誉教授桑原道義先生は、平成13年8月21日逝去されました。享年77歳でした。先生の強い御遺志により、ご家族だけでお見送りになりました。ここに改めて先生のご冥福をお祈りいたします。

桑原道義先生を偲ぶ

英保 茂（昭39年卒）

英保 茂（昭39年卒）

を受けられよ。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

た、種々の学会においても多大のご活躍をされました。日本自動制御協会（現システム制御情報学会）会長、計測制御学会および日本M.E.学会副会長、日本医用画像工学会会長等を歴任され、我が国の学術技術の振興に多大の貢献をされました。これら一連の功績により平成11年11月勲二等瑞宝章を受章されました。

京大における研究は、前半は非線形振動や摩擦、安定問題などの自動制御関連の研究を中心に、後半は医用工学に関連して医学と工学との境界研究を先頭に立つて展開され、シミュレーション技術を駆使した臨床データ解析システムの作成など医療分野への工学技術の利用に大きな貢献をなされました。さらに、心臓画像を中心とする医用画像処理の研究においては、先進的な研究成果を次々と発表され、国内外でのその活躍は広く認められているところです。

また、先生は、研究面のみならず、種々の事柄に対しても、本来のあるべき姿を的確にとらえ、不合理なことや間違っていると思われる考え方に対するはつきりとした主張を展開されることがあり、その強さに驚かされることもありました。が、正しいことはきっちりと主張しなくてはならないということを身を以てお示しになつておられたような気がしています。そういうことをした厳しさの一方で研究室の学生を

はじめ、先生に教えを受けた方々には頼りがいのある暖かいバスと慕われておりました。70歳にならえて、いろいろのお仕事を退かれ、完全に第一線を引退したという龍度を強く貫き通されました。奥様と残りの人生を楽しもうとされておられましたが、一年半前に思いました。何とかもう一度お元気なお姿を拝見したいものだと思っておりましたが、まことに残念です。重ねて、ここに、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

會員寄稿

戦中派の学生生活（XII）

活 (XII)

(レ) 戦後の混乱期

活 (XII)
[最終回]

食糧難は戦後に始まつた問題ではなかつた。既に戦争中から深刻な問題になつてゐた。青年以上の男性の多くが軍務に服し、残りの男性及び女性も軍需工場その他に動員された。そのため農漁村におけりに任せ、加えて膨大な海外派兵の需要を満たさねばならないことを考へると、内地で極端な食糧不足が生じるのは当然のことだつた。しかし戦争中は強力な食糧統制と、「勝つまでは欲しがりません」とか「贅沢は敵だ」とかの精神キャンペーンによつて、国民の不満を押さえていたが、實際は外一部に知れないところで闇取引が横行してゐた。

われたり、裕福な家庭のごみ箱を調べてヤミ物資の摘発をするなど、行き過ぎた行動も日常茶飯事であつた。

空襲で家を失い、家族とも連絡が取れず、戦後の荒廃の中で職を失い、生きる意欲を失つた浮浪者が、駅や地下道に溢れるという悲惨な情景は町の至るところで見られた。朝出勤するとき寝そべっていた浮浪者が、夕方帰るときには遺体となつて、警官が収容していると言う光景は珍しいことはなかつた。

一方、インフレーションが猛烈な勢いで進行し、これを抑制するとともに富の再配分を行うことを目的に、財産税、非戦災者税、農地開放、新円発行・旧円封鎖等課税や改革が次々実施された。

しかしインフレーションのお蔭で、戦時中の膨大な戦費を賄うために発行された国債は価値がなくなり、国家財政は随分助かつたことも忘れてはならない。これも富の再配分の一つであろう。

おが家では農地を保有していたお蔭で、幸運にも、大変な食糧難の時にも、米や野菜に関する限り格別困らない生活を送ることができた。最低の生活は保証されたのである。米さえあれば、魚や肉などは配給だけで辛抱できないことはなかつたので、闇物資に手を出す必要を余り感じなかつた。そう言う意味では模範的な家庭であった。しかし終戦の昭和20年にになると、配給は極めて少なくなり、お魚などは、1ヶ月に一度口にす

ることができるかどうかと言ふ状態に追い込まれた。これには参った。闇ルートを探してなんとか入手できないかと考えたが、これまで闇には一切手を出さなかつた我が家である。闇ルートの情報は全くない。近所を尋ね回つたら、なんと、隣家が裏日本の海岸辺りの村の出身で、いりこ(だじいやこ)であれば幾らでもあることが判つた。早速、できるだけ大きいのを買つた。これを夕飯の時だけ2、3匹焼いて醤油をかけてかじつた。貴重な蛋白源であると同時にカルシウム源でもあつた。あの時の美味しさは今も口の中に残つてゐる。

こんな状態が終戦まで続いた。

戦後の食糧難はもつと酷かつた。しかも闇取引は半ば公然と行われ、都會地の人は晴れ着を米と替えるべくせつせと農家に運んだ。わが家でも闇取引の罪悪感は薄らぎ、牛肉やお魚などの入手は専ら闇ルートを利用した。馴れると、品物が入荷したときはご用聞きに来てくれるようになつた。またいざと言うときには、伝家の宝刀である米と物々交換すると言う手があつた。しかし実際の生活は、生活費のことを考えるとぜい沢はおろか最低の生活に甘んじなければならなかつた。

保有米に恵まれていたわが家にして然りである。都會に住む一般の人々は食うや食わざの毎日であつた。新京極の闇市では、スイトン(詳細は知らないが聞くところによれば、米の粉で作った団子を汁

に浮かべたもの?)を売る店に長蛇の列ができたり、四条河原町の街角に屋台店が並び、その中に焼鳥屋を見付け覗いてみると、足の先や頭のない美味しそうな焼鳥を売つてゐる。不審に思い親父さんに

「足の先がないが何の鳥か。」と聞けば、親父小声で答えて曰く

「へエ、殿様蛙です。」

一般家庭の食事は言語に絶する酷いものだつた。ご飯の量を増やし少しでも空腹感を癪すために、お粥を常食とした。それに、更に量を増やすため薩摩芋の蔓を細かく刻んで煮たものを加えることも一部では行われていた。いまでは想像もできない毎日であつた。

こうした時代に私の母は近所の畑で野菜を作っていた。手間の掛からない薩摩芋は老人の母にとつては格好の作物であった。人に恩をを賣ることが大変好きだった母は、収穫時、芋の蔓はもちろんのこと薩摩芋自身も含めて、知人に気前よく差し上げていたようである。

母の死後、食糧難の時代に大変お世話になつたことが忘れられないと、見知らぬ人が何人かわざわざ仏壇に参詣に見えたことがあつた。

b. 学生生活

i. 緑上げ夏休み

わが家はそれでよいにしても、一般的の家庭では、米の代わりに砂糖が配給されたのでは腹の足しにはならない。カロリー計算は辻褄が合うのかも知らないが、日本人の長い習慣から、我々は胃壁にブレッシャを感じる程食べないと満足感が得られない。ないより増し等言つておれない深刻な問題である。

大学でもこの事態を深刻に受け止め、急遽夏休みを繰上げ、学生をそれぞれの國許に帰らせると言ふ措置が講ぜられた。本来なら7月10日から夏休みに入るべきところ、確かに2週間程早く6月下旬に早々と夏期休暇に入つたと記憶している。前代未聞のことであつた。

また当時の食糧難を偲ばせる出来事としてこんなことがあつた。3月と言えば卒業期である。私が

か、米軍の放出物資と思われる白砂糖が米の代わりに配給されたことがあつた。

わが家は農家として保有米を所有し、米だけは充分とは言わないまでも、不自由しない程度には確保していたので、砂糖の配給をむしろ喜んだ。砂糖と言えば、赤ちゃん用に粉ミルクと共に配給があったのを、親がピンはねして口にした記憶がある。甘いものに飢えていたので、砂糖は貴重品であった。そんな状態のところへ砂糖が配給されたのである。早速何処かで重曹を手に入れ、カルメラを作つて舌鼓を打つたのを覚えてい

る。

お寺で何をやろうと言うのか、詳しく聞くのも悪いと思って、それ以上聞くのを止めた。当日、怪げに思いながら顔を出した。既に学生諸君が20名ぐらい本堂の縁側に屯してゐた。学生実験担当の教官3、4人が招待され、宴は既に始まつてゐた。ご馳走は蒸し芋だつた。もちろん酒などあろう筈がない。昔の謝恩会の思い出があるので、多少ど肝を抜かれた。

しかし考えてみれば無理もない。薩摩芋にしても、親許からこそり送つてもらつたか、あるいは近郊の農家に買い出しに行って、本身低頭の上、高い金を出して手に入れた貴重な食糧である。何れにしても苦労して集めたのに間違いはない。改めて学生諸君のご苦労とご好意に感謝の念を禁じ得なかつた。戦後、最初の謝恩会(あるいは卒業コンペ)であつた。私には、

長い間ご愛読頂いた「戦中派の学生生活」ここに終稿を迎えることになりました。掲載の最初は平成8年1月、174号でしたから、実際に6年に近い長編の手記になります。終わりに臨んで

卒業した昭和18年9月と言えば、既に米を始め各種の生活物資の配給制度が実施されていた。そんな中で大変苦労をしたが、卒業に当たつて諸先生を招いて京都ホテルで謝恩会を開催した。私達の後は戦局の急迫に伴つて、謝恩会の開催は中絶したままになつて、そこが昭和22年か23年か定かではないが、謝恩会を兼ねてお別れ会を開催したいので出席して欲しいとの招待があつた。

「ホホウ、大したものんぢやないか。場所は?」

「百万遍のお寺でやります。」「? ? ?

お寺で何をやろうと言うのか、詳しく述べても悪いと思って、それ以上聞くのを止めた。当日、怪げに思いながら顔を出した。既に学生諸君が20名ぐらい本堂の縁側に屯してゐた。学生実験担当の教官3、4人が招待され、宴は既に出来上がつていて原稿を渡しましたものですから、原稿が不足した時だけ細切れにして掲載されたたまに出来上がつていていた原稿を渡します。終わりに臨み深くお詫び申します。

私達は太平洋戦争の最中に特に特異な学生生活を送り、敗戦により日本が大きな変革を遂げたことでもあって、今にして記録に留めて置かないと、信じる人もなくなり忘れ去られることを恐れ、掲載前に文書化していたのです。

たまたま洛友会報の編集子か

ら、会報に投稿された原稿が不足した時の穴埋めの原稿を乞われ、既に出来上がつていていた原稿を渡します。終わりに臨み深くお詫び申します。

私は、瀬戸内海を眼下に見渡すことができる。正面に女木島、右に屋島、そしてその先端に国立ハンセン病療養所の一つ大島青松園のある大島が見える。静かな海をフエリーガ数隻白い波を後ろに引きな

屋 島 幻 影

藤本 靖(昭49年卒)

がら行き交う景色は、どんなに疲れていても自然と心が落ち着く風景だ。しかし、それぞれの場所には、忘れようとしても忘れられない過去があることも事実である。

私は休日には一人あるいは夫婦で山に登ることが多く、近くの屋島にはぶらりと一人でよく登る。200メートル程度の山でありながら、山上からの眺望は素晴らしい。登るたびに、雲や日差しの具合、波の青さ、風が揺らす木の葉の音などがいつも違っていて、小さな感動を覚える。

今年3月下旬、一人で屋島に登ったときのことだ。よく整備された西側の登山道を30分くらいかけて登ると屋島寺にいる。いつものようにお参りを済ませ、北端への西側遊歩道を歩き、高松市の市街地を望む展望台に出る。沖合の木島に並んで女木島が浮かんでいる。またの名を鬼ヶ島ともい、桃太郎の伝説で有名な洞窟がある島だが、実際は凝灰岩を採取した所である。

屋島の北嶺の最北端に行くと、備讃瀬戸が一望できる所がある。真っ青な空と静かな海に浮かぶ島々、遠くに小豆島、眼下に大島。大島はハンセン病患者が今も暮らす悲しい島である。目と鼻の先の高松港から一旦大島に送られた人

の多くは、2度と故郷に帰ることなくこの地で死んでいった。そして家族は差別におびえ苦しみながら縁を切つたという。

屋島の北端から東側に歩くと、五剣山と屋島に囲まれた壇ノ浦が眼下に広がる。屋島の裾野には、

那須与一が扇の的を射た相引川も見渡せる。当時は数百メートルの干涸で、干潮時には潮が東西に引いていくことから名付けられたこの川も、今は50メートル程度の小さな川となっている。

壇ノ浦に向かって東斜面をゆっくり降りて行く。鬱蒼とした木の間をくぐりながら、蒿や草で埋もれた古い石段を降りて行くと、30分程でふもとの民家に出る。そこから1キロメートル歩いた所に、樹齢100年はあろうかという直径2メートルほどのモクノ木と七分咲きの花をつけた桜の木に守られた古い墓がある。昨日遅くまで飲んだせいか、ひどく疲れ、古びた五輪塔の脇に腰を下ろした。

しばらく座つてみると奇妙なことに気がついた。いつもなら頻繁に自動車が通るのだが今日は1台も見かけない。そればかりか人影も見えない。急に空が暗くなり冷たい風が吹き始めた。・・・

その時突然空が明るくなり、辺りが静かになつた。夢を見ていたのだ。そういえばすわつているこの五輪塔は、平家軍の能登守教経に仕えた菊王丸の墓だ。屋島の合戦で、教経が義経を狙い射た弓矢

に向かつて、義経の家来の佐藤継信が身代わりになつて主君を守つた所だ。ひよつとすると、先ほど

の武者は倒れた佐藤継信の首を狙つて、逆に継信の弟の弓矢に倒れた菊王丸ではなかつたか。合戦の時期もちよど3月の寒い頃だった聞く。

不思議な気持ちで家路についた。私の家は、屋島から南に歩いて20分くらいの丘の上にあるが、近くの「菜切地蔵」にちなんで菜

め、初めて菜切地蔵に立ち寄つた。狭い境内に言い伝えが書いてある。驚いたことに、ここも源平合戦ゆかりの地であった。義経が当地に陣を張つたとき、炊事のまな板がなかつたため、弁慶が石の地蔵を倒し、その背に菜つ葉を置いて長刀で刻み汁を作り、義経に献上したという。石地蔵の背には刀矢が小船に向かって放れた。小船に乗つていた数人の武者がもんどううつて海上に倒れた。その拍子に波しぶきとともに、形見の刀が私の腰掛けていたあたりまで飛んできた。思わず身をかがめてよけた。

その時突然空が明るくなり、辺りが静かになつた。夢を見ていたのだ。そういえばすわつているこの五輪塔は、平家軍の能登守教経に仕えた菊王丸の墓だ。屋島の合戦で、教経が義経を狙い射た弓矢に向かつて、義経の家来の佐藤継信が身代わりになつて主君を守つた所だ。ひよつとすると、先ほど

の武者は倒れた佐藤継信の首を狙つて、逆に継信の弟の弓矢に倒れた菊王丸ではなかつたか。合戦の時期もちよど3月の寒い頃だった聞く。

「忙しさの中のラグビー」

大植 康司（昭58年卒）

大学を卒業して18年になつた。会員諸兄と同じく、忙しい日々であると自分では思つてゐる。中島義道氏の「生きにくい」という著作の中では、次のように書かれている。

「歳をとると日常生活は定型化し、新鮮な感動も薄れ、つまりうまく生きてゆくための習慣が蓄積される。われわれは、習慣の蓄積によつて、あまり考えなくとも、新し

め、初めて菜切地蔵に立ち寄つた。狭い境内に言い伝えが書いてある。驚いたことに、ここも源平合戦ゆかりの地であった。義経が当地に陣を張つたとき、炊事のまな板がなかつたため、弁慶が石の地蔵を倒し、その背に菜つ葉を置いて長刀で刻み汁を作り、義経に献上したという。石地蔵の背には刀矢が小船に向かって放れた。小船に乗つていた数人の武者がもんどううつて海上に倒れた。その拍子に波しぶきとともに、形見の刀が私の腰掛けていたあたりまで飛んできた。思わず身をかがめてよけた。

その時突然空が明るくなり、辺りが静かになつた。夢を見ていたのだ。そういえばすわつているこの五輪塔は、平家軍の能登守教経に仕えた菊王丸の墓だ。屋島の合戦で、教経が義経を狙い射た弓矢に向かつて、義経の家来の佐藤継信が身代わりになつて主君を守つた所だ。ひよつとすると、先ほど

の武者は倒れた佐藤継信の首を狙つて、逆に継信の弟の弓矢に倒れた菊王丸ではなかつたか。合戦の時期もちよど3月の寒い頃だった聞く。

不思議な気持ちで家路についた。私の家は、屋島から南に歩いて20分くらいの丘の上にあるが、近くの「菜切地蔵」にちなんで菜

め、初めて菜切地蔵に立ち寄つた。狭い境内に言い伝えが書いてある。驚いたことに、ここも源平合戦ゆかりの地であった。義経が当地に陣を張つたとき、炊事のまな板がなかつたため、弁慶が石の地蔵を倒し、その背に菜つ葉を置いて長刀で刻み汁を作り、義経に献上したという。石地蔵の背には刀矢が小船に向かって放れた。小船に乗つていた数人の武者がもんどううつて海上に倒れた。その拍子に波しぶきとともに、形見の刀が私の腰掛けていたあたりまで飛んできた。思わず身をかがめてよけた。

その時突然空が明るくなり、辺りが静かになつた。夢を見ていたのだ。そういえばすわつているこの五輪塔は、平家軍の能登守教経に仕えた菊王丸の墓だ。屋島の合戦で、教経が義経を狙い射た弓矢に向かつて、義経の家来の佐藤継信が身代わりになつて主君を守つた所だ。ひよつとすると、先ほど

の武者は倒れた佐藤継信の首を狙つて、逆に継信の弟の弓矢に倒れた菊王丸ではなかつたか。合戦の時期もちよど3月の寒い頃だった聞く。

（中略）歳をとればとるほど、生活の効率化が記憶を消し、過去を消してゆく。」こういう原理で、一日一年が早く進んでいくらしい。しかし、本当にそうだろうか。今までにドッゲイヤーの世の中、色々新しいものが日常生活に入り込むだけでなく、仕事の上でも短期でめまぐるしく変わる環境に対応していくかなくてはならない。定型的なものの割合が増えて記憶に残らないのではなく、歳をとることにより、一日一年の長さが相対的に短くなり、すごいスピードで時間が流れていくのだろう。

忙しい中、情報の氾濫がさらに繁忙感を増させる。インターネットの普及により、新聞、書物等の媒体からではなく、インターネットから情報収集の割合が増えていく。インターネットはいながらにして、容易に情報を取ることがができるが、手軽さゆえにもつともよい情報はないか探し回らせる心安らかならぬ媒体である。休日など、インターネットをしながら1時間、2時間経つことがよくある。パソコンの普及か携帯電話の普及のためか、日本全体で見てもTV視聴に割く時間が減つたと聞く。この忙しい中、積極的に時間を割くようになつたものが一つある。それはラグビーである。同じマンションに住んでいて長男同士が同級生である人に誘われて、子

供ラグビークラブを一緒に作って指導を始めた。その方は同志社大学のラグビー部のOBで、子供が幼稚園に入った頃からずっと子供ラグビーの指導をしたかったそうだ。私は高校時代の体育の授業のみでラグビーの経験はなかった。若干かじりもしたが、大学時代から個人技に頼るサッカーより、流麗なオープン攻撃をみせるラグビーラグビーの方に興味が移つていった。京大ラグビー部の試合を見にいったこともあった。社会人になつてテレビでもサッカーの試合は見なくなつた代わりに、ラグビーの試合は努めて見るようになつた。このような時に誘われて、二つ返事でOKした。指導者はほとんどが子供達の保護者であり、高校、大学での経験者は少なく、8割が未経験者である。指導者を見る限り、いろんな職種の方で、いずれも忙しい方ばかりであるが、最近はやりの言葉で言えば「はまつた」状態になつた。子供そつちのけで、子供の練習後、親同士が練習するありさまである。

する、追う、いざれも、子供のとうに楽しい。無謀にも壮年の試合にも出た。衰えた体力ながら、手を抜くのがおもしろい。「ラグビーは子供を大人にし、大人を子供にする。」という言葉があるがまさしくその通りである。

練習前は、子供達に何の練習をしようか、イメージを膨らませながら練習場に行く。試合でも子供たちにどういうプレーをさせたいか、想像する。情報の氾濫を忘れて、無心になれる。自分がボールを追っているときは、「忙しさ」を忘れる瞬間である。練習を終わった時は、怪我をせずに終わってほっとした気持ちで一杯である。

ラグビーは好きな読書とともに、これからも私に心の糧を与えてくれそうな気がする。

洛友二六年会・
力ナダ旅行（三）

平成12年9月8日～16日
12日、昨日の過密スケチ

と一緒だった。最初このホテルの位置が分からず「サルファー山に行く人はタクシーに乗りあわせよう」と言っていたが、このホテルの裏にロープウェイの駅があると分かり大笑い。

8時半、朝食。ここも日本人客が多く、朝食はバイキングだが、ご飯に味噌汁他、日本食が多種用意されおり、テーブルには割り箸が置いてあった。

9時40分、北尾君、徳永夫妻とサルファー山（2285m）ロープウェイへ、山駅に着いた頃雪が降り出した。たいした雪でもないので山頂へ、約10分の道のり。しつかりした木製（木が豊富な力ナダなればこそ）の階段、滑る心配はない。雪はすぐ上がり、まずまずの見晴らし、帰路に就く頃笛岡夫妻等第2陣に会う。ラッキーにも虹が出た。

サルファー山を下りて、徳永夫妻とアップバー・ホット・スプリングス（硫黄温泉）へ、行動派の北尾君はさつさと別行動。温泉と言つても温水プールのようなもの、水着が必要。温度38℃、入浴者は種々雑多、みんなゆっくり浸かっているが雰囲気だけ味わつて出る事にした。

ホテルに戻り、チェックアウトを済ませ、シャトルバス（無料）で街へ出る。ジャスパーと違つてなかなかの賑わい。御夫人方はもっぱらショッピングに関心だが先ず腹ごしらへ、旅慣れた徳永さんの後に付いて中華料理店へ、4組の夫婦が6人前の料理で満腹、味もなかなかであつた。隣にOKショッピング（大橋巨泉の店）があり、従業員は日本人、ここで大分時間を過ごした。

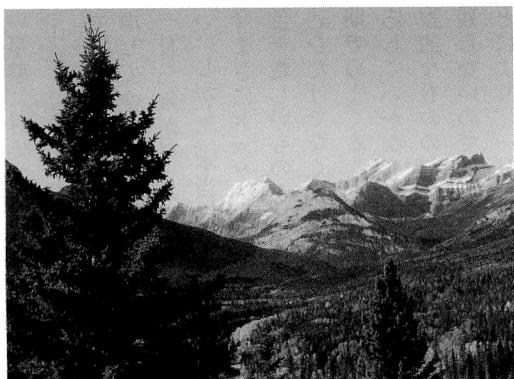
筆者にとつてショッキングなニュース、「愛知県で豪雨災害」を聞いた。「そんな馬鹿な、2カ月間雨が無くて困っている」と言つたら「2階に新聞のファックスがある」と言われて行つた。「12日（日本時間）愛知県に100年に一度の豪雨、河川の決壊で被害甚大」との事、心配が今は日本は夜中、連絡は夜取る事にした。シャトルバスでホテルに戻る。15時ホテルを出発する。これから、カナナスキス（明日のカルガリーマではパンフのガイド（日本人男性）のお世話になる。

国道1号線を東進、右折してルート40に入る。右に冬期オリンピックのスラローム競技場になつたナキスカ・スキーセンター場を眺め、暫ら行くとカナナスキス・カントリーの大きな標識が現れた。

ここは先住民の保護区で、先住民は定職が無く補助金で暮らしている。結構高級車など持つて優雅に暮らしているとの事、批判もあるようだが、彼らにしてみれば「土地と生活を奪われた」恨みの方が大きいかも。

カナナスキスはアルバータ州の開発規制区域に指定され、手付かずの自然が多く残つている。ヴィレッジは2軒の大手系列ホテルが中心となって、レストランやみやげ物店はホテル以外はほとんど無い。我々はその一つ、デルタ・ロッジ・アソト・カナナスキスに泊まつた。16時到着。

ジャスパーのパーク・ロッジホテルと同じく、広大な自然の中の高級ホテル（カルガリー・オリエンピックの時出来たのではないかと思う）。部屋は広々として、ツインの場合各



部屋の中に階段があり、ベッドルームが2階になつてゐるのに驚いた。又暖炉のある部屋に当たつた運のいい組もあつた。

静かでのびやかなカナナスキーの自然は険しいロッキーの山の旅の疲れを和らげてくれる。

ここは人気の高い36ホテルのゴルフ場があり、例の「気違ひ諸氏」が申し込んだがウエイターグループでも満員、残念でした。散策の他、乗馬、テニス、サイクリングなどが出来るそうだ。

夕食、この旅行ですつかり高級感に慣れてしまう。ウエイターの勧めに従つてカリフォルニア産のロゼを味わう。話が弾み、美味しく食事できた。

夕食後筆者の住所、知多市の知人に電話、「雨は凄かつたが知多市は新川・天白川のような決壊はなく、大事無い」とのこと。一安心。カナディアン・ロッキー観光はここカナナスキスで終わり、明日からは終盤に入る。

13時50分出発、国道1号線はボウ川に沿つ一路東へ、兎に角広い。ゆったりと広い4車線の国道建設費（土地代と工事費）は日本の何分の1（何十分の1？）だろう。愛知万博が2005年に開催の予定だが、

13日、11時半までフリータイム。ロッキーの勇姿が見えるViewpointまで散策する組、レンタサイクルで中出（？）する組、ホテル内でショッピングする組いろいろ。

11時半、本日の宿泊地、バンクーバー島のビクトリアへ向かつて出発、バス・飛行機・フェリーによる移動日だ。

冬期オリンピックのスラローム・コースを左に眺めながら川沿いに走る。牧場ゲートではバスは一時停止。

前から保安官姿の若い男女が馬に乗つ近づいて来る。空馬を一匹連れて。バスの手前10メートルで空砲をぶつ放す。何事か？男の保安官がピストルを上に向け、入つてくる。WANTEDの「チラシ」を持つSASAOKAと書いてある。「こ

やつを連行する」といい、笠岡君を馬に乗せ林の中に入つて行つた。チヨット驚いたが牧場側の演出、乗馬の達者な笠岡は若い女保安官との対話を楽しみ“deth by hanging”は免れた。

昼食は牧場（ranch）の食堂（丸太小屋、壁には狩猟道具や大型獣の剥製が一杯飾つてある）で取る。ビュフェ方式、さすが大きなビュフェであり。食後牧場内を散策、棚の中は馬が數十頭、牛は見えない。

13時50分出発、国道1号線はボウ川に沿つ一路東へ、兎に角広い。ゆったりと広い4車線の国道建設費（土地代と工事費）は日本の何分の1（何十分の1？）だろう。愛知万博が2005年に開催の予定だが、

まだ異論があつて決まらない。カルガリーに譲つておけばよかつのに。（ガイドの余談）「このボウ河原でN.H.K.大河ドラマ・川中島の口ヶがあった。」

14時20分、カルガリーに入る。人口90万人、アルバータ州人口の3分の1の大都会だ。国道2号線と交差する。1号線はビクトリア基点東西7千キロ、2号線は北へ州都エドモントンへ南は米国モンタナ州へ通じている。

15時、カルガリー空港到着

16時半、カルガリー発

17時5分、バンクーバー着

日程表によれば35分でロッキーを越え、バンクーバー着と勘違いして

いた。行けども行けども山又山、大小の湖が点在する。後で聞いたら時間1時間忘れていた。700キロを35分で飛べる筈が無い。ロッキーの西には3つの山脈がある。前座山脈と

言ふ。バンクーバーに近づくと遥か南方に雪をかぶつた独立峰が見えた。（アメリカ国境地域の名峰ベーカー山）

川端さんの出迎えを受け、フェリーベンチ（ツワツセン）へ行く。18時15分到着、フェリーは先入れ／先出しで、我々のバスは一番乗り込んで。ここで川端さんと別れ、ビクトリアでは笠岡君の妹さん

(Mrs. Mitiko Warkentyne、以後道子さんと呼ばせて頂く)のお世話になる事になる。フェリーは19時15分

九州ぐらいの大きさ、大陸との距離は瀬戸内海より大きい。州都ビクトリアはその南端の小さい半島の付け根に位置する。大型フェリーは満員、夕食時とあつてカフェテリアは長蛇の列だ。

フェリーの着く港は半島の先端、スワーヴベイ、ここに20時45分到着、バスに乗ったまま下船、ホテルに向かう。ホテルは市の中心部、州議事堂（この議事堂はあす見学するが、電飾で縁取りされ暗闇に美しく輝いていた。）のすぐ側のクラリオン・ホテル・グランド・パシフィック、21時30分到着。ここはロッキーの豪華ロッジとは違う普通の都市ホテルである。今日も強行軍で疲れ気味、明日の予定を聞いてすぐ就寝した。

14日、いよいよカナダ旅行最後の日だ。8時半、小じんまりした食堂で朝食、道子さんに先ず州議事堂に案内して頂く。カナダは合衆国で連邦政府と同格との事、任命は現英國女王と聞いて驚く。この旅行を通じて地名はもちろん、山、川、建物にまで英國名が多く付けられている。一体カナダは独立國かと疑いたくなる。議事堂内部は重厚そのもの、廊下は美術館と間違ふほどだ。

次に隣のブリティッシュ・コロンビア博物館の見学。我々はシニア料金で入館、道子さんは以前ここに勤務されており、短い時間に効率的にご案内頂いた。時間が無いのでインディアンの歴史・文化に関する展示に押つて見学した。インディアンとカナダを第二の故郷とし、最後はビクトリアで亡くなつた。この縁で博士の故郷・盛岡市とビクトリアは姉



nationと呼んでいる。

お昼になった。道子さんに近くのみやげ物店に案内して頂き、それぞれショッピング、軽い昼食をとつた。13時半、AKトラベル手配の観光バスで市内観光に出かける。

ビクトリアの観光施設、ブッチャードガーデンズに到着。観光客で賑わつて、百花繚乱、日本庭もある、立派な庭園ではあるが、珍しい花はない。

夫婦の遺志（パンクーバーのクイーンエリザベス公園（無料）を見ていいので感動は薄かつた。入口で記念写真。

妹都市になつた。)の記念碑を訪れた。碑には「願くはわれ太平洋のかけ橋とならん」と博士の言葉が日本語で刻んである。ビクトリアには日本字を書ける人はそう居ない。この字は「道子さん書」だそうだ。碑は海に望み、遙か盛岡の方を向いているという。

オーケ・ペイを左に眺めて、ビーコン・ビル公園の角で、カナダ横断国道1号線の西の基点「マイル・ゼロ」の標識をバスの上から見(海上ルートもハイウェイの距離に含まれる)ながらホテルに帰った。

18時、夕食は道子さんに設定して頂いた。由緒あるエンプレス・ホテル、予約の難しい所をまげてとつて頂いた。

最後の晩餐である。ビュフェスタイルで各自好みの飲み物を注文、テーブルも出来るだけこれまでどちがう組と同席する。会話も隣同士でなく全員旅行の感想などスピーチして一部を紹介する。先ず、幹事役の立川君。

「猛暑の日本から抜け出し、昔懐かしい寝台、展望車・食堂車で17時間、山に登つたら新雪というスタートだったが後は快晴に恵まれロッキーの山々の絶景、雪上車に乗つて寒風吹きすさぶ氷河見物、千古の氷が融けた険しい峰々に囲まれた美しい湖巡り。そして温泉と景色の好いデラックスなロッジ・ホテルで美味し空気・水・食べ物を味わいました。また、山と森の美しいカナナスクのくつろぎ、ビクトリアの素晴らしい景観も楽しみ、一生の思い出になる充実した8日間でした。」

(安田君の奥様は旅行直前に目の手術、体調を思つて前後に一泊余裕をもたれた。)

(奥様の感想、お手紙から)

「不安を抱きながら参加させて頂いた旅行でございましたが、何とか元気で、喜びを噛みしめ乍ら素晴らしい10日間を過ごす事が出来ました。思い切つて仲間に入れて頂いて本当によかったですと心から嬉しく思っています。」

山本君は片肺、「私にとつて人生のこの時期に、長年の願望であったカナディアン・ロッキーの美観に接する事が出来ました事はまことに得難い収穫であつたと心から喜んでいます。」

2200m前後のアサバスカ氷河では新聞の字が読めなくなつたが、1400m前後のバンフまで下がるところつと良くなつた。」

杉山君は近年病氣や手術との付き合いが多く、「単身参加は一抹の不安があつたが、素晴らしいツアーを皆さんと楽しめた。こんな嬉しい事はない。」

篠岡君から健康の不安をおして参考された三君に無事完走の記念品が贈られた。

途中ハグニング!

陽気なカナダ人男性が我々を日本語で歌える歌が欲しい。京都大学歌(昭和15年制定)を知らないか」と

歌いたが、誰も知らぬ。「歌え」のコールに京大合唱団OBの筆者が紹

介。(当時、入学式・卒業式には合唱団が歌つた。)

「九重に花を匂へる千年的都にあります」歌詞は古臭いが曲は莊重!

唱団が歌つた。)

「21時、閉会。これから歩いて10分、港の夜景、議事堂の電飾を楽しみながらホテルへ帰つて帰国準備。」

15日、トロントまで足を伸ばす若林夫妻は早朝、6時半の出発。あとは方面別にビクトリア空港の出発時間に合わせて帰国する事になる。筆者は関空組とサンフランシスコに向かう滝波夫妻と第2陣、8時出発。

以上で私の拙い旅行記を終わります。到底カナディアン・ロッキーノの素晴らしい景色を書き尽くせませんが、ご容赦ください。70才を越えての海外同窓旅行、参加出来た26年会員は10人(会員の4分の1)でした。参加出来た幸せを感謝すると共に、同行の皆様特に幹事役の立川君、綿密な企画と世話をしてくれました。35周年には御所近くのホテルに池上・近藤両先生にお出まし頂きました。そして今回は桂キャンパスの建設地近くの嵐山を選びました。

40周年は定期期にはほぼ重なります。2分程度の各人の、これまで・今後、またそれらを巡るスピーチは、組織を担いまた組織と共に在つた5年前とは異なり、語り手の人となりが滲み、感想がごく自然に語られて、紋切り型にはない味わい豊かなものとなつていました。

宴会後に話し込む中で、新キャンパスについて想像を馳せる一方、京大における今後の教育について色々注文をつける意見もだされました。曰く、視野をもつと広げられるようにしたいものだ、新しい仕事につくに当たつての積極

昭和36年卒クラス同窓会

卒業40周年を記念して、昭和36年電気・電子学科の卒業生が、平成13年5月26日、嵐山・渡月亭に集いました。卒業生83名の約半分の39名が集つて、旧交を温め、近況について語り合いました。昭和36年(1961年)の卒業生のうち関東在住者は例年3月6日に、関西在住者は6月1日に会合を持ち、5年に一度京都に集まっています。30周年には新築された電気・電子教室を見学し、貴船に集中いました。35周年には御所近くのホテルに池上・近藤両先生にお出まし頂きました。そして今回は桂キャンパスの建設地近くの嵐山を選びました。

翌日は、嵯峨野の散策、愛宕山への登山などに出かけるグループが分成され解散しました。

石黒武彦・大串健吾記

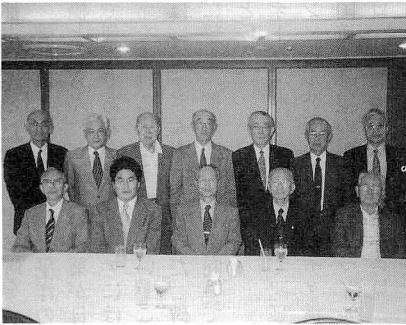
性をもつと持たせるようにしたいた経験から吐露される感想で、大學に寄せる期待が込められたものと言えます。

翌日は、嵯峨野の散策、愛宕山への登山などに出かけるグループが分成され解散しました。

立場に立つて若手を受け入れて働き手の中核を担いそして指導的



支部だより



中部支部の平成13年度総会は6月30日11時から、名古屋駅前の名鉄グランドホテルで開催されました。本部・教室から木村名誉教授、奥村教授のご出席頂き、支部からは大野支部長はじめ10名が参加しました。

なかつた白川郷（世界遺産）を訪ねる事にしました。全線が開通すると便利になり過ぎ、逆に混雑が見れるチャンスではないでしょうか。

介も交え、予定時間は瞬く間に過ぎてしまいました。最後に昨年から校歌代わりに歌う事になつた「琵琶湖周航歌」を全員で歌つて懇親会を締めくくりました。

た。いよいよ手狭になつた吉田キヤンパスから桂への工学部移転の話については、桂にまだそんな広い土地があつたかと、参加した会員のほとんどが時代の推移を痛感する

編集後記

総会について本部の木村先生から洛友会の現況についてご説明頂きました。本部予算の基本方針をきまりました。各支部に2年分10万円を支給するから予算に計上してよい事

大野支部長の挨拶の後議題に入りました。先ず支部役員については全員留任とし、可決されました。

事業計画は別記「平成13年度事業計画」とおりです。お説明合わせの上多数のご参加をお待ちしています。特に本年度秋の例会は「東海北陸道」が庄川まで開通していますのでこれまでとても行け

〔キューリーの発行等〕等ご説明がありました。

次に教室の奥村先生から教室の現況、卒業生の就職状況についてご説明頂きました。桂キャンパスで移転問題で大変である事。移転時期は平成15年、詳しくは次回会報で説明する。吉田キャンパスと並存するので移動（1時間半）が問題であるとのことです。

総会終了後、記念撮影、引続き懇親会に入りました。昭和8年卒の大先輩川端さんのご発声による乾杯に始まり、先生方との歓談久しぶりの先輩・友人とビールで喉を潤しながらの談笑と、恒例の「近況報告」には先生方の自己紹

当支部としては13年度は計上しないが予算としてはそのままにしておく)本年度から会誌発行をして年4回に復活する事、会費納入状況など説明があり、最後に各々

平成13年度
中部支部事業計画

1 懇親開碁大会	日 時	9月8日（土）
2 懇親ゴルフ大会	日 時	10月21日（日）
N S D 社友会サロン	場 所	名古屋通信ビル
豊田パブリックゴルフ場	場 所	豊田パブリックゴルフ場
3組予定	3組予定	3組予定
3 家族 同伴秋の例会	日 時	11月10日（土）
名鉄メルサ西口 8時30分出発	行 先	世界遺産・白川郷

東北支部総会報告

場 所 豊田パブリックゴルフ場
3組予定
3家族 同伴秋の例会
日 時 11月10日（土）
名鉄メルサ西口 8時30分出発
行き先 世界遺産・白川郷

会報193号(7)　お詫びと訂正

会報193号（7月15日発行）の計報欄で「松田正彦」（昭22）氏の計報を掲載いたしましたが、誤報であつたことが判明いたしました。

ご本人様はじめ周辺の皆様、同期の皆様に大変ご迷惑をお掛けすることとなり、申し訳なく思っております。お詫びして訂正いたします。

第36回洛友会東北支部総会は京都ほどではないものの猛暑の仙台で7月28日(土)に市内のホテルで開催されました。

大家支部長の挨拶の後、次年度の役員、予算の承認と型通りの総

会手続きを済ませ、会員相互の懇談へと移りました。今回は本部より、近藤先生にお越しいただき工学部の移転や今後の洛友会の方について紹介がありま



東京支部（旧）総務幹事
大橋 正良（昭56年卒）記

卷之三